

Title	書評：本多真隆著『家族情緒の歴史社会学：「家」と「近代家族」のはざまを読む』晃洋書房、2018年
Sub Title	
Author	有末, 賢(Arisue, Ken)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2019
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.24 (2019. 7) ,p.199- 202
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20190706-0199">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20190706-0199</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：

本多真隆著『家族情緒の歴史社会学——「家」と「近代家族」のはざまを読む』

晃洋書房、2018年

有末 賢

本書は、家族社会学・教育社会学の重鎮である渡辺秀樹先生門下の俊英である本多真隆氏の博士論文の公刊である。本多氏は、学部が早稲田大学人間科学部の池岡義孝先生のゼミから慶應義塾大学大学院社会学研究科に進学して、渡辺先生の指導の下、博士論文を執筆した。この経歴からもわかるように、家族社会学の「王道」を歩んでいる。私は、家族社会学の専門でもないのに、依頼に応じてこの書評を執筆することになったが、本書は、家族社会学のみならず、社会学史・社会学説の財産として刻まれる価値があると確信しているからである。

優れている点として3点を挙げたい。まず第一に、戸田貞三、川島武宜の家族論や有賀喜左衛門、喜多野清一、小山隆は言うに及ばず、『国体の本義』や『教育勅語』などのイデオロギーの解釈、廃娼・存娼論や花柳界をめぐる議論など、言説の幅を政治・社会・文化の広範な領域に広げて、「家族情緒」という主題に結び付けている点である。しかも驚いたのは、M.ウェバーの「家産制」を支えていたエートスである「ピエテート」概念の受容をめぐる戦前の社会学理論の議論を「家族情緒」という家族社会学の根幹と結び付けている点である。「ピエテート」という概念については知ってはいたが、本書によって、蘇らせていただいた。「ピエテート」概念の受容とも関連するが、評価すべき第2点目は、家族社会学を日本の社会科学の歴史に位置づけるという壮大な構想が意図されている。私自身も、法学部政治学科において社会学を学び始め、丸山政治学や川島法律学などを踏まえて、社会学に入っていた経緯があるが、とかく最近の若い研究者たちは、家族問題や都市問題、社会問題など具体的な問題から社会学に入門しがちである。本多氏の正当な学問入門はむしろ少数派と言っても良いだろう。本書が、近代化や社会変動、西洋化などの国際環境、また民主主義やデモクラシーに価値を置きながら「社会科学としての家族社会学」を目指しているのは重要な意義である。理論と言うと、今、現在流行りの「構築主義」などに頼りたがる傾向があるが、本書から、オルテガの『大衆の反逆』

(1929年)を連想させる「保守主義の伝統」を感じたのは私一人だろうか。第三点目の功績は、副題ともなっている「家」と「近代家族」のはざまを読む、というチャレンジである。日本の家族社会学において、有賀喜左衛門、喜多野清一らの戦前からの「家」理論と戦後、森岡清美から現在の上野千鶴子、落合恵美子に至るまでの「近代家族論」とでは明らかな断層が存在している。戦前にはジェンダー論やフェミニズムが存在していなかった点などは理解しやすいが、その「はざま」には何が存在しているのか？大きな空白になってしまっている。例えば、現在「感情社会学」の視点で扱われる内容は、本多氏が正当に掬い取っている「家族情緒」という

有末賢「書評：本多真隆著『家族情緒の歴史社会学——「家」と「近代家族」のはざまを読む』  
『三田社会学』第24号（2019年7月）199-202頁

関係性こそ、「家」理論の内容である。このような「はざま」を読む行為は今後とも続けられなければならない、と思われる。

このように優れた点を挙げだすときりがないが、この書評はリプライ付きの予定である。したがって、筆者からの疑問点、問題点を指摘して、ぜひ著者にご回答をいただきたい。第一に「家族情緒」の言説において、その「多様性」が強調されているが、著者が挙げている言説の中にある種の「対立軸」が想定されていないか？という疑問である。検討されている学者、学説、戦前のイデオロギーなど対象とされている言説は、適切であるのだが、著者である分析者の解釈が入り込むとき、何らかの二分法が侵入していないだろうか？例えば、合理的に対して感情的、あるいは合理的対伝統的、また日本的に対して西洋的、保守的対革新的、封建的に対して民主的などの対位法である。M.ウェーバーは、有名な行為の四類型の中で、目的合理的行為、価値合理的行為、感情的行為、伝統的行為という分類を用いた。ピエテートについても伝統的行為のエートスとして導き出されている。このように、対立軸や二分法を使用してしまうと、「多様性」と言っても、ある種の紋切り型の分類の上に整理されてしまうのではないだろうか。「家族情緒」と言ったとき、その内容の多様性、複雑性、包含性が生じる。社会学説や公的イデオロギーは、「家族情緒」の上澄み部分だけを言説化しているにすぎない。

例えば、「西洋」との対抗という国際環境において、「日本的」という枠組みが生まれたという解釈は、一般的であり、妥当ではあると思われる。しかし、明治期以降の「帝国日本」はアジアへの侵略を着々と進めていき、大亜細亜主義や亜細亜帝国を目指していたともいわれている。そうだとするならば、台湾、朝鮮半島、満州や中国大陸などの「家族主義」とも連携し、対抗関係にあったはずである。牧野巽や戸田貞三、有賀喜左衛門や福武直などがアジアの家、家族に関心を示していたこともまた事実である。そのあたりの文脈を考慮しないで、西洋的と日本的を安易に二項対立で括ってしまうと、家族情緒の「多様性」を掬い損ねてしまう危険性が生ずる。もう一つ例を挙げると、戦前の「家」理論の言説が、学説・公的権力・男性側に偏っているという特徴である。あえて、『青鞥』の女性たちや社会主義、無政府主義などのイデオロギーは採用しなかったのであろうが、高群逸枝も柳田国男もほとんど登場しない。夏目漱石や森鷗外などの文学に「家族情緒」の言説が満載されていることは、江藤淳の評論<sup>1)</sup>において既に解き明かされてはいるが、本多氏の叙述に重ね合わせてみると実に興味深い考察がなされるような気がする。つまり、本多氏は、保守対革新の二項対立図式をこの言説分析に密かに持ち込んではいないかという疑問である。

酒井直樹は、単一文化主義も多文化主義も「文化主義」というコインの裏表にしかすぎず、国民文化の創造と神話化の過程で一種のイデオロギーとなってしまったと批判している<sup>2)</sup>が、同様に「家」イデオロギーも「近代家族主義」も、「家族主義」というコインの裏表に過ぎない。その意味では、保守対革新の対立軸で表そうとしても、乗り超えられない部分があるのではないだろうか。著者の論理の組み立てにおいて、もう一工夫が欲しかったような気がする。

第 2 点目は、「近代家族」そのものの多様性についてである。ハーバーマスも言うように近代

そのものが多様であり、乗り越えられないものとしての「近代」という側面もある。「近代家族」の特徴は、従来から①「核家族」としての小家族、②<子ども>時代の誕生、③性別役割分業の確立（専業主婦の誕生）④福祉国家と福祉社会によるケアの社会化、⑤サラリーマン階層と都市新中間層の誕生、⑥消費生活の充実と家事の合理化、⑦休日と余暇生活（サブカルチャーの登場）、⑧学校文化と教育の重要性、⑨<制度家族>から<友愛家族>へ、⑩女性の社会的進出、などが挙げられている。しかし、一口に「核家族」と言っても、直系家族になる前の「直系制家族」と言われる小家族も存在している。つまり、息子の結婚から、すぐに親との同居を始めるのではなく、一定の期間をおいて、親の隠居や介護を契機に親との同居を始めるケースである。これは、理念としては直系家族の考え方を踏襲しているが、形態としては「核家族」の期間が長くなり、いわゆる「嫁と姑の対立」を生みやすくさせている。このように、日本のどこにでも見られる「核家族」なのか、「直系拡大家族」なのかよくわからないような「近代家族」は多く存在している。「家」と「近代家族」を画然と分けることなど容易なことではない。

本多氏は、「家」の家族情緒と「近代家族」の家族情緒を連続したものとして捉えているのであろうか？それとも断絶したものとして捉えているのであろうか？もちろん、戦後世代や女性が働きだした世代において、断絶した家族情緒が醸し出されてきたことは事実である。「見合い結婚」から「恋愛結婚」が主流となり、「婚前交渉」についても「当たり前」という価値観が支配的となっている。「一夫一婦制」については肯定的で、「不倫」については否定的ではあるが、場合によっては「離婚」もやむを得ない、という考え方に落ち着いている。確かに「家」意識は衰退しているが、米村千代『家の存続戦略』（1999年）にも詳述されているように、日本的経営や資本家、財閥、華族などに「家」意識は脈々と受け継がれている。

もともと、実態としての「近代家族」は多様であり、一筋縄ではいかない。現在模索されている脱<近代家族>のモデル<sup>3)</sup>も、性別分業規範を超えた「男女共同参画」やジェンダー規範の相対化もそうであるが、もともと「女性の社会進出」は<近代家族>が用意した基準であった。「同性愛家族」にしても少子化にしても、近代の価値を<相対化>し、近代以前の価値も含めて復権していく方向である。そうであるならば、「家」の家族情緒と「近代家族」の家族情緒は、どこかでつながっており、画然と分けることはできない。もう一つ見ておかなければならないのは、世代間の継承関係である。戦後民法において、長男による相続から嫡出子均分相続制度へと変化した。これによって、「家」の家督、不動産などの財産も分けられることになった。この相続による「家族情緒」の変化をどのように見たらよいであろうか。さらに、2000年代から始まった介護保険制度によって、在宅ケアといえども、専門的な福祉サービスが受けられるようになってきた。情緒や感情と言っても経済合理的な行為の基礎の上に立っている。「近代家族」とは、非常に複雑で多様な生き物である。その意味で、言説上においてモデル化する際の限界も心得ておかなければならないのではないだろうか。

第三に課題だと考えられるのは、歴史社会学の再構築という問題である。「家族情緒」という文脈をどのように設定するか、これはひとえに著者である本多氏の方法論にかかっている。「家

族情緒」を「夫婦の和」の言説と見るか、「親子の孝」の感情と見るか、養子縁組関係、嫁と姑の関係、母子・父子関係、兄弟・姉妹関係、擬制的親子関係、恋愛や結婚観、性行動と性教育、虐待やDVなど数限りない「文脈」(コンテキスト)が存在している。さらに、前近代における武士階級、明治期以後の権力者、学者、公的イデオロギーから町人階級、農村階層、自営業者層、都市下層など言説の担い手も多様である。すでにジェンダー論で指摘したように、平塚らいてう、与謝野晶子、伊藤野枝、神近市子などの『青鞥』のフェミニストたちを除いたとしても、高群逸枝、山田わかなどは無視できない。

そう考えていくと、功績のところでは指摘した本多氏が扱った社会学説・理論、支配的イデオロギーの言説分析は、一定の限界の上に成り立っているともいえる。社会史の考え方が政治史・経済史などの支配的歴史観に対抗して、一種の「もう一つの歴史」として日常生活の歴史を資料とした点を考えていくと、家族情緒の歴史社会学も、もっと日常生活の歴史に肉薄していくものを題材として考えても良かったのではないだろうか。例えば、農村家族の女子の〈身売り〉や〈姥捨て伝説〉など、悲惨な話は無数にある。あるいは、夏目漱石の小説に出てくる近代人の自我と家族関係を考察するという方向もある。また、牟田和恵<sup>4)</sup>の先行研究にある「修身教科書」や米村千代<sup>5)</sup>の先行研究にある「家訓・家憲」の言説分析などと比較してみるのも有意義ではなかろうか。

歴史社会学という方法は、あらゆる歴史を対象とすることができるが、「家族情緒」であれば成立しても、「家族社会学の歴史社会学」では、社会学の屋上屋を重ねることになってしまう。学説史は社会学史として異なる分野が存在しているし、歴史社会学とは方法が異なってくる。もちろん、本多氏は、学説史を書こうとしたわけではない。したがって、家族情緒の広範な社会史を目指して今後も研究を続けてほしいと思う。いずれにしても、素晴らしい博士論文の公刊と言えよう。

### 【註】

- 1) 江藤淳『成熟と喪失：“母”の崩壊』河出書房新社、1967年。後に講談社文芸文庫に入った時には、解説を上野千鶴子が執筆している。
- 2) 酒井直樹「序論—ナショナリティと母(国)語の政治—」酒井直樹・ブレット・ド・バリー・伊豫谷登士翁篇『ナショナリティの脱構築』柏書房、9—53頁、1996年、参照。
- 3) 牟田和恵編『家族を超える社会学—新たな生の基盤を求めて—』新曜社、2009年、渡辺秀樹・竹之下弘久編著『越境する家族社会学』学文社、2014年、など参照。
- 4) 牟田和恵「日本近代化と家族—明治期「家族国家観」再考—」筒井清忠編『「近代日本」の歴史社会学—心性と構造—』所収、67—93頁、木鐸社、1990年。
- 5) 米村千代『「家」の存続戦略』勁草書房、1999年。

(ありすえ けん 亜細亜大学都市創造学部)